昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和六十年三月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十七巻　第三号

（通第四二八号）

目次

親鸞聖人の信仰……近角常観……(1)
大いなる受入れ……池山榮吉……(5)
慈光日誌抄……西元宗助……(9)
一道会の記……榊原徳草……(12)
自覚についての無相師の書信……岩崎成章……(17)
信仰書簡……菅瀬芳英……(20)
御名につながるいのち……花田正夫……(23)

親鸞聖人の信仰

近角常観

如来の本願（三）

親鸞聖人の上を見るに、信仰の発る一念のみならず、それから以後の人生百般のこと何から何まで総て仏の恵から成り立って居る。私も十年前、回向を賜わって、それぎりでなしに、それ以後何事も皆他力の回向であると有り難く喜んで居る。此方からはばからいばかりである。皆向うからどん〳〵与えて下さる。この如くにして最後に、仏果にいたるまで此回向の泉の絶間がない。よりて聖人は「謹んで浄土真宗を案ずるに二種の回向あり、一には往相、二には還相なり」と宣い、殆んど人生の総てを尽して回向の中に入れて仕舞って、何もかも皆仏の恵みを蒙らぬものはないと云われたのである。

それでその回向の味を溯りて行くと、諸君は絶対の仏陀をあり〳〵と眼中に仰ぐことであろう。今日の人はそもそも絶対は実在なりや否や、或は絶対には人格ありや否やというて研究して居るが、宗教としてはそんな問題は一つも必要はない。絶対の信仰は先方から恵まれるもので、既にそれ自身が明白なる事実である。

私は多年の間、慈悲という言辞でこの絶対者を云い表わして居った。四年前に「歎異抄」の精神を話した時も始終仏は慈悲の塊であると説いた。今日から云うと其慈悲の方角からが向うから出て来るから回向と云うのであった。私は年々聖人の書を味わせて頂いて来ました。昨年以来耳慣れた本願と仰せられた言辞の上に非常の味を知らせて頂いた。実にこの本願ということを仰せられたは偶然のことではない、私共は朝夕に教えられるにも如来の本願の辱きことを以てせられ、又説教の上でも常に如来の本願、他力の本願ということを聞かされて居るから、我等の耳に慣れきってある古い言辞であった。然るに今日では私の耳に最も新しい語として力強く感ずるのは、亦この本願という言辞である。これ以外に新しい言辞を持って来ても私には喜ぶことが出来ない。こう気付いてから聖人の御著書を

拝見すると、本願という言辞が基本となっている。単に慈悲と云うと、ただ何となう親切な感じが我れに来ることを表わすまでで、文字が抽象的だけに物足らぬ感じがする。慈悲の喩には常に親の事を云うが、親が子を日夜に憐むその親心は何かともう一つ押すと、至愛至極の本願であると云わねば慈悲の極致を云い尽すことが出来ぬ。本願という言葉のみが、よく絶対の仏陀が昼夜たえざる念力を以て、日夜に我々に対して下さることを表わして居る。名号というも光明というも、その本源は仏陀の御親が、我々に対する本願で、実に確乎動かざる偉大なる力である。この力を認めずに、徒らに途中に坐り込んで仕舞うのは、他力どころではない、それは無力である。他力というは今迄の如き自力の回向では到底やりきれぬこととなって、顧れば他即仏願力の非常の恵みをもって我の上に蒙らされる親の念力の顕れである。親の誠の我に対する心であると云わねば尽くされぬ。そこで親鸞聖人は他力というは如来の本願力なりと云うて居られる。

誠に歎異抄を取って見るに、もし本願の文字を除けば此抄は読むことが出来ぬ。先ず第一章には「弥陀の誓願不思議に助けられまゐらせて」と云い「罪悪深重煩悩熾盛の衆生を悪の人をえらばれず」と云い「弥陀の本願には老少善助けんがための願にてまします」と云い「本願を信ぜんには他の善も要にあらず」と云い「弥陀の本願を妨ぐる程の悪なきが故に」と云う。第二章以下にも本願の文字のない所はあるが、この本願という文字は如何にも力強く云うべからざる勢を以て貫いている。

現時の多くの人は如来の本願と聞いて、果して親の念力の如何にも偉大なる大慈悲の力として、本願という文字を解して居るであろうか。もし偉大なる力が向うから我等に向って下さるという意味に取らずして、唯漫然と聞き去り云い去ったならば、頗る残念である。極りなき偉大なる御力が私の方に顕われ来った他力の至極を十分に遺憾なく云いあらわした此本願という文字である。

親鸞聖人は一代に何を実践し何を説き何を為されしかというに、たゞこの偉大なる仏陀の念力願力を実験し、過去の生活より未来の云為行動に至るまで、皆悉く仏陀の偉大なる神力より来らざるはなしという信仰を以て、且つ行い且つ説かせられたのである。であるから聖人の意を以て見れば釈尊一代の経説広しと雖も最初の華厳経より最後の涅槃経に至るまでの間に、或は真実と説き或は真諦、実諦と説いてあるのは、結局唯この仏陀の偉大なる真実至誠を説くの外なしというのである。それを具体的に云えば、即ち如来の本願である。これを正面から堂々と説いたのが大無量寿経である。其処でこの如来の本願、即ち如来の偉大な

る力を正面から説いた大無量寿経の宗教は真実である。

「教行信証」の教の巻に

夫れ真実の教を顕さば即ち大無量寿経是なり

と標挙したのは全くこの意味である。かく云えばとて他の経文が悪いというのではないが、一代経中どれだけ絶対の境界を高尚に説いても、それがこの相対世界の人世の上に及ばねば一向何の所詮もない。この絶対界即ち如来の広大の境をこの人生の上に渡すところで初めて宗教となる。而もその渡す力は即ち本願であり回向である。もしも絶対を高尚に説いても夫は唯仏の境である、宗教とは申されぬ、又もしこの社会人生を都合よくやるためならば道徳で事足り宗教の必要はない。而してこの絶対の霊境に到達するに相対人世の方面から歩を進めても到り得ない、絶対の意志即仏の本願からこの人生の方に向って手を下して引入れて下さるのである。その偉大なる本願を大無量寿経に説かれてあるから、釈尊がこの経を説かれるとき真に満足なる形を以て説かれている。聖人の和讃に

如来の光瑞希有にして
阿難はなはだこころよく
如是之義ととへりしに
出世の本意あらはせり

と讃述せられた。まことに此大無量寿経は仏陀大慈悲の発現したるところ、真に仏教の真面目、一代諸経の真髄であると聖人が述べられたのである。

私は三年前にこの修養会でこの教行信証を話させて頂いた節には、釈尊の伝記から溯ってこの大経は真実の教にして即ち浄土真宗これであるということを話したが、それではどうも十分でない。自分が回顧して信仰に入りたる道筋を跡づけて見ると、如何にも釈尊の成道なされた実験と共鳴する様に思われた点から左様に述べたまでであって、斯の如く信仰の実験として釈尊を仰ぐのもよけれども、実験の最終に光の現われたのは釈尊の如く自ら光明を放って絶対の境界に入ったのではない。全く無明暗黒の私に向って慈悲の塊の仏陀より恵みを下し賜ったのである、全く如来回向の信心である。

聖人は殆んど釈尊を無視されたかの様に、真宗の寺院には釈尊の像を安置せぬのは、一面からは如何にも怪しからぬことの様に思われるが、その実聖人にあっては、弥陀釈迦の二尊を別視することなく、仏陀と云えば弥陀一仏であって、この人生に現われて下さったのが釈尊であるという思想である。それ故弥陀一仏と云えばとて他の多くの仏菩薩を排除したのではない。絶対の唯一である。ただに釈尊のみでない聖徳太子も法然上人も皆ひとしく仏陀広大の恵みの顕われであると見給うたのである。然れば此人生に応

現し給うた仏陀のみならず、種々の化身までが皆一仏願力の顕現であって種々に善巧方便して我身を絶対の霊境に引入れ給うに外ならぬと信ぜざるを得ない。噫奇なるかな不可思議なるかな、此人生はこの如き偉大なる仏力が縦横無尽に働くところの舞台にして、結局一仏名号、即南無阿弥陀仏であると云うべきである。此事を正面から説かれたのが大経である。聖人が教行信証の教の巻に於て

是を以て如来の本願を説くを経の宗致と為す、即ち仏の名号を以て経の体とするなり

と云われたところである。

以上の如く述べ来ったのは、殊更に教行信証の文脈を逐うて解釈したのではない、自分の信仰上からこの仏陀絶対の恵みを味う時は、是の如く云うより外はないのである。

併しかように云ったからとて、自分の信仰が変ったのではない。三年以前に慈悲という言辞で説いたのも、此偉大なる仏力を云うたのであるが、その慈悲を説くにあたりて何となく本願という言辞では説き難い感がした。何故かと云うと本願というと直に五劫思惟とか十劫正覚ということが邪魔になったのであった。然るに能く味って見れば、此本願という文字の上に於てこそ絶対の仏陀の威神力を見ることが出来る。さればこそ歎異抄に、

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐さふらひし云々。

というである。この絶対の本願力、仏陀の御恵みは他力信仰の云うべからざる味である。この如来の選択本願が、即ち南無阿弥陀仏という名号である。よりて次に一仏名号という題でこの点を充分に話そうと思うのである。

——以下次号——

法然上人の讃仏歌

さへられぬ光もあるををしなべて　へだてがほなるあさがすみかな

月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人のこころにぞすむ

阿弥陀仏と十声唱へてまどろまん　ながきねぶりになりもこそすが

大いなる受入れ

池山榮吉

今春以来、私は大谷大学の専門部の学生に向って、自分の信仰の体験に就て、約七八回にわたり講話をして来ましたが、その都度いつもかの『歎異抄』の「親鸞におきては――」の一節に及んで行かねば、どうも自分の体験した信仰が言いあらわしにくかったことを告白せねばならぬ。今日もまた当然そこが中心となるでありましょう。むしろ私は、「大いなる受入れ」と題し、私共の幾多の先達の方々が経験なされた、尊い信仰入門の動機について申上げようと思います。

去年の暮より、今年の春にかけて歎異抄の第六章の、親鸞は弟子一人も持たず、というところを深く味わしていただいてから、かって感じていたよりは更に深く、玲瓏玉の如き聖人を拝することが出来ました。そして有名な「親鸞におきては唯念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰せを蒙りて、信ずる他に別の子細なきなり」の一節にあらわるる聖人の御性格とを拝して、信仰に入るには、先ず無に入らねばならぬものであることをさとりました。

昨今は土用夏ではげしい暑さに朝から汗だくで気も遠くなりそうであります。しかしこの汗だくの夏の私共の体も湯に入ると、今までの不快さを忘れてサラリとした気持になります。同様にこの煩悩に汚れた身も、一度信仰に入れば、サラリとした軽いおじけぬ心になるので、私は勿体ないことながら、歎異抄は入浴案内のような役目を果して下さるものと考えます。その湯に入るには裸にならねばならない。ではどうして裸になるか。信仰に入るには色々な事柄が解ったとか、智慧を持っているとかでは大抵の場合邪魔にこそなれ、決して役立ってはくれない。それには尊い体験が必要であります。これが無ければ望んで息まぬ信仰は確立しないといわねばなりません。

○

然らば、親鸞聖人はその尊い体験を何時得られたであろうか。それは吉水の入室と申して、六角堂の百日の御参籠の後、吉水の法然上人をその御庵室にお訪ねなされた時であります。その時の模様は歎異抄の第二節に「親鸞におきては……」とあってこれを明かにしてあります。まことに親鸞聖人は斯く心を虚うして、つまり裸になって御師匠法然さまを御訪ねなされた時に、ピタッと御自身の心の中に法然様の御言葉が融け込んで、あの尊い他力摂生の妙諦を受入れられたのでありました。私共は何時まる裸な心になり切るだろうか。生涯に一度の廻心は、何時味われるでありましょうか。

これを普遍的に解り易い喩をもって御示しになったのが、かの有名な善導大師の二河白道の喩であります。旅人が西をさして行く。と或る日気がつくと寂しいところに来ていた。ふと後から怪しげな声がする。見れば恐ろしい獣と多くの賊。そしてその旅人を襲うてきた。旅人は恐怖の余り前方へ走り出す。と大きな河が横たわっていて、道を遮って行けない。半分は火の河で、半分は水の河であり、その中に一本の細い白道が辛うじてある丈である。どうしたものかと、後や左右から迫る恐ろしさの中に途方にくれて立っている。とその時はるか西岸に人が居て、その白道を通って彼岸に渡れ、案ずることはないと声をかけて呉れた。旅人は勇み立って覚束なげな足取りで細い白道をゆき、遂に彼岸に渡りおわる。――というのがこの有名な二河喩であります。

○

私共は自我と申して、俺が、という感じがまことに強くあります。而して人生における成功や失敗というものは多く自我の感じの働き方によって決るものであります。而しこの俺がの感じが信仰の門に入るに必要なものであろうか。

自我の考は様々な煩悩となって、我と我身を縛り、どんなに焦るとも、信仰の門に入ることは許されないのであります。信仰を得て間違いない往生を願う人は、白紙になって、自らの心を虚にして先達の教ゆる声をきき、指す方に突き進まねばなりませぬ。而してその時の希望としては、それが自我、煩悩に根ざすものであってならぬことは、申すまでもないことであります。

ドイツに、ニイチェと云う哲学者が居ます。彼はかの『ツアラストラ』という書物の中に「ほんに人間は汚い流れだ。この汚い流れを受けて、自らも亦汚れないためには海でなければならぬ」と云って居ります。更に「私は超人を教える。超人こそはその海に比すべきである。その海というべき超人の世界へは、お前達の自身の見下げ果てを感ずる者のみ、超人の領域に入ることを得る。お前達の経験し得る中での最大のものは、大いなる自らの見下げ果てである。

自分の理性も智慧も道徳をもすべてを見下げ果てた時が超人だ。人間は綱だ、超人と動物との間にかけられた綱だ。この綱は危い渡り、道すがら、かえりみ、おののき、立止りがある。而しそれを省みず、その綱を渡ろうとする者こそ人間であるべきだ」と云って居ります。

これはまことによく仏教の二河白道の譬喩に似ておりますが、恰もニイチェという人は、ショペンハウアーと云う学者を知っており、そのショペンハウアーは仏教思想に通じていたから、自然とこの人の頭の中にも、仏教思想が入っていただろうと考えられます。とまれ個人から全人に向う道程をかように示していることは深い興味をそそります。

○

その超人には成りたいものだと、羨ましくてならぬが、私共はその反対の煩悩具足の凡夫であるばかりに、超人となり得ぬ悲しみがあります。親鸞聖人もそこを「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、々々」と御自分の不甲斐無さを歎かれました。が然しその聖人はその中より、この煩悩の繋縛よりのがれて、菩提の道に入りたいと、いそしまるる御心持、御希望をお持ちでありました。ここが尊いのであります。石川啄木はその子に「この親にも親の親にも似る勿れ、かく汝が父は思えるぞ児よ」という一首をのこしております。それは啄木自身の運命というものが、好ましいものでなかった。むしろ悲哀や、苦悩にみちみちたものであった為に、願わくば、わが子達よ、お前達は、親の俺にも、祖父にも似てくれるな、それはつまらぬものであったからだ。お前達はお前達の望ましき運命を持つように。と歌ったものであります。この中には子等への絶大の愛は感ぜられるが、心を虚にして、更に上なる大いなる力を受け入れる態度が見えませぬ。

○

では聖人が大いなる受入れをなされた刹那は、どうであっただろうか。聖人の道を求められる熱烈さは、つきつめて六角堂の御参籠となった。それは丁度韋提希夫人が、その子の阿闍世太子によって、牢に幽閉せられた時、思いあまって遂に合掌して、釈尊に救いを求められたと同じであったのです。満参籠の日の帰途、聖人は吉水の法然上人の禅房に歩みを運ばれたが、宿善開発の虫の報らせか、さぞ軽くあっただろうと思われます。それはすでにその時仏の力が予感せられ、御足が吉水へ向ったのは、御心が他力へ他力へと向っていたからでありましょう。

そして御対面なされるや、御師匠法然上人の何もかもが、どっと聖人の御胸の中に融けこみ、しっかりと落付かれたのであります。その時のおよろこびが歎異抄の中に「親鸞におきてはただ念仏して云々」とあって、これを明にせら

れてあります。その時の聖人は、二十九年の御生涯中に得られた智慧、才覚、あらゆるものを御捨てになって、吉水の禅室をお訪ねになり、一語は一語と御師匠法然様からおききになった時「おゝ、左様で御座いましたか……」という大きなうなずきが御心に感ぜられ、その一刹那に、従来の自力聖道の求道のお生活から、他力浄土への道に突き進まれることになったのであります。

酒飲みが酒屋に徳利を提て買いに行っても酒が無ければ手を空しくして帰らねばならない。当時親鸞聖人が栂尾の明恵上人をおたずねなされたものとすれば、どうであっただろうか、恐らく求めるものが与えられぬ御悩みを抱いて、空しく帰られたでありましょう。法然上人は実に親鸞聖人の求めなさるものを、豊に持合せておいでになりました。それは四十三年にわたる長い年月の尊い御体験であったのです。その御体験は、正しく二つで、自力聖道と、他力摂生とであります。而もその二つは同時に合せ持たれたのでなく、前者が形を潜めて、後者がその位置についたのでありました。その尊い御体験が聖人の純なお心の中に「おお左様で御座いましたか」と大きく受入れられた刹那に、私共が七百年の後、更に今後幾久しく救われる身となることが決ったと見るべきであります。

尊きことは、大いなる受け入れであり、これこそ、信仰の門に入る大きなる鍵であるといわねばなりませぬ。

昭和七年九月発行『法蔵』誌より転載

——○——○——

をり〳〵の歌

信国　淳

おのづから御名の力に知りそめぬただのこころに生くるてふこと

南無仏のみ名ながりせば現し身のただ生き生くることあるべしや

おん念仏こころに入れて申せよと聖は宣らすみ世のいのりに

うつそみの生命かなしむまことよりたびたる御名よただに受けなむ

慈光日誌抄

――無宿善の機――

西元宗助

歎異抄には、「ただ」という聖人のお言葉が三ヶ所、でてくる。

第一条（章）には「ただ信心」と、第二条には「ただ念仏して」と、後序には「ただ念仏のみぞ」と。そうして国文学者の安良岡康作氏の『歎異抄』（旺文社）その他には、たとえば「ただ、信心」と、句読点がうってさえある。

さて、この「ただ」とは、どういうことを意味するのであろうか。そのことを歎異抄によってうかがうに、第一条に「その故は、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生を助けんがための願にてまします」とあるように、罪悪深重（この文字をよくよくわが身にいただくと、大変なお言葉。お前は地獄しかいける筈はないぞと聞こえてくる）――その罪業深重の衆生（その一人は宗助）を助けんがための大悲の願であるからこそ、「ただ信心を要とす」なのである。

このように、「ただ」は機の深信を意味するようである。そう云えば第二条も「いずれの行も及び難き身なれば、ても地獄は一定すみかぞかし」であればこそ「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずる外に別の子細なきなり」なのであろう。

ところで、「ただ」は、このように出離の縁あることなき「機の深信」を根底とするものであればこそ、必然的に「法の深信」を、本願力の廻向を意味する。じじつ、歎異抄の「ただ」は、曇鸞大師のかの「世尊、我一心帰命尽十方無碍光如来」の「一心」に相応して、他力廻向の信を意味していることが頷かれる。

まことに、われら「邪見無信のもの」（唯心抄文意）には、一心専念ということは微塵もない。真に一心専念にましますのは願力無窮の大悲の如来にてまします。まことに第一条の「ただ念仏」も、第二条の「ただ念仏」も、願力廻向の信心であり、願力廻向の名号である。故に「ただ」という。

さる一年間、龍谷大学の学生諸君と共に、歎異抄を拝読させていただいて、このようなことを、しみじみと教えられたことでありました。

殊に歎異抄の終り、「流罪記録」の末尾に蓮如上人が、「右コノ聖教（歎異抄のこと）ハ当流大事ノ聖教タルナリ。無宿善ノ機ニ於イテハ左右ナク、コレヲ許スベカラザルモノナリ」と奥書されている。いったい、この奥書の「無宿善ノ機」とは誰のことなのかと、自問自答して、それは他の人ではない。「唯除五逆誹謗正法」と、名指しで喚ばれている「邪見無信」のわれらのことであると。すなわち歎異抄は、無宿善の機のものをこそ、なんとかしてなんとかして、助け救わずにはおかんという大悲の本願名号の教であるかと、聖人の『教行信証文類』と照応して讃嘆したことでありました。

いつも
いつも
善いのは　自分
悪いのは　他人

南無阿弥陀仏

○　○

ほとんど毎朝、食卓にすわると、口に出しても、出さなくても、思うこと、それは、お念仏申す身にしていただけたこと、そして静坐できる身にしていただけたご恩である。

朝、たとえ十分間でも、いや五分間でも、瞑目して静坐する。椅子の場合もあるし、坐布団の場合もある。そして昼間は、暇があれば電車の中でも、どこでも、そっと静坐する。

その要領は、まず背骨を立てて肩の力を抜く。そして静かに静かに息を吐いていく。そうすると、おのずから下肚に力がみなぎってくる。

もともと、極端なあわてもので、せっかちで、性来まったく落着きのない私である。これは現に家人の保証するところ。しかし、その落着きのない小心のお蔭で、ともかく、今日まで静坐してまいりました。そういえば、一昔まえのことになりますが、シベリヤの俘虜貨車の中でも、チタの牢獄の中でも、落着かぬままに坐ってまいりました。

○　○

ところで、あるとき、講義が一段落したので、真宗学の学生諸君に、静坐の要領をお話して、さあ、すわってみて

くださいと、言うと、突如、一学生から「それは雑行雑修自力ではありませんか」と。

わたしは学生の質問は大好きであるが、これには少し面喰った。それで少し逆襲しました。それなら、お尋ねするが、今、あなたが、こうして私の講義を聞いていて下さる。これは雑行雑修自力なのか、どうか。やがて帰宅して夕食をいただく、これは雑行雑修自力であるのか、ないのか。

わたしが静坐するのは、静坐によって悟りをひらこうなどというのではない。むしろ悟れぬ煩悩具足の凡夫なるわが身を知らされて、いよいよ仏法聴聞の姿勢を確立させていただきたい一念に外ならない。

げんに食事するのには食事の作法がある。いや、お茶のようなものにも茶道と云って、表千家とか裏千家とかがあるではありませんか。人間は一生、立ったり坐ったり腰かけたりする。況んや、あなたがたお坊さまは、お経をおあげなさるとき、キチンと坐らねばならぬではありませんかと、少し悲しくなって言うと、さすが、よくうなずいてくれたようでありました。

そこで私、これら未来の和上様との一応のお別れに臨んで申しました。われらのなすこと、することごとく自力ならざるはなしと言えます。しかし、その自力のはからいを、自力無劫と知らしめて、本願他力に帰せしめるものこそ、それこそ本願のお念仏でございます。わたしは、そのように教えられ、そのようにお聞かせにあずかって、お念仏申させていただいておりますと、こう、申し述べて、一年間講義を聞いて下さった学生諸君への謝辞とした。

○　○

「良寛歌集」より抄出

かにかくにものな思ひそ弥陀仏の本の誓のあるにまかせて

不可思議の弥陀の誓のなかりせば　何をこの世の思ひ出とせん

愚かなる身こそなかなかうれしけれ　弥陀の誓にあふとおもへば

手にさはるものこそなけれ法の道　それがさながらそれにありせば

一道会の記（二）

榊原徳草

続いて私は次のようなお話をしました。

私は聖人が常々独り言のように仰言って居られた「弥陀五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの（沢山の）業を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」の「業」ということを深く心に思われるので、この業について話させて頂きました。

業とは身・口・意の三業の総称で、私の生きている全体のはたらきであり、その業は、過去久遠の昔からの宿業の現われが今の私の生きている姿であり、又それが原因となって未来の果を来すので「業の転ずること瀑流の如し」と云われています。歎異抄十三章にも「善き心のおこるも宿業の催す故なり、悪事の思はれせらるゝも悪業のはかろふゆえなり。故聖人の仰せには、兎の毛、羊の毛の端にゐる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずといふことなしと知るべし」と仰せられ、続いて千人殺しのお話に「聖人は或時、唯円房はわがいふことをば信ずるか、と仰せのさふらひしあひだ、さんさふらふと、申し候しかば、さらばわがいはんこと、たがふまじきかと、かさねて仰せの候ひしあひだ、つつしんで領状まうして候ひしかば、たとへばひとを千人殺してんや、しからば往生は一定すべしと、仰せ候ひしとき、仰せにては候へども、一人もこの身の器量にては殺しつべしともおぼえず候と、申して候ひしかば、さてはいかに親鸞が云ふことをたがふまじきとはいふぞと、これにてしるべし。なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人殺せといはんに、すなはち殺すべし。然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わが心のよくて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人殺すこともあるべしと仰せの候ひしは、我等が心のよきをはよしと思ひ、あしきことをばあしと思ひて、本願の不思議にて助けたまふといふことを、知らざることを

仰せの候ひしなり」――この続きの所に「さるべき業縁の催せば、如何なる振舞もすべし」との聖人の仰せがあります。

さて、業について弱肉強食ということに話を進めたいと思います。学者の説に依ると、約六十一億年前に、海中に一単細胞生物が発生し、それが分化して種々の生物が生れた。この生物同志が「弱肉強食」で、強いものが弱い者を食って背髄動物に発展し、水中では海水から酸素を腮から取り、陸上に上ってからは空気から酸素をとり、種々の動物が発生した。現在、蛙はおたまじゃくしの時は腮から水中の酸素をとり、蛙になると肺が出来て空気から酸素をとっている。

人類が誕生したのは約三百八十万年前という。そして現在、資本主義と共産主義の二陣営に分れて「弱肉強食」をもって地球征服を競っているのであります。

このように久遠の昔からの宿業の顕われが弱肉強食の現実です。或る念仏者は「業の車がくる〳〵廻る、廻らば廻れ臨終まで。それから先に車なし」と喜ばれています。又源通寺和上の歌に「宿業でたとへぼけても狂うてもたがへたまはぬ弥陀の約束」となり。北陸の念仏喜ぶ老人の庭の柿の木に、柿が熟して一杯だった。そこへ悪童どもがやって来て取っている。それを家の中から見て「さるべき業縁の催さば」の金句を喜ぶ老人は、ただ「さるべき、さるべき」とお念仏して見て居られたという。この老人は常に「さるべき、さるべき」の一句に念仏を喜んでいられた。人呼んで「さるべき爺さん」と讃嘆していると云います。業のことについての感想はこれで終ります。

それから此頃思いますのは、近角常観師でも、池山榮吉先生でも、今御浄土で、如来様と百味の飲食を頂いて楽しい日々を過して居られるでしょうか、私はそうでないと思います。

御本典の行巻に「爾れば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静に衆禍の波転ず。即ち無明の闇を被し、速に無量光明土に到りて大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふなり、知るべし」と聖人の仰せであります。仏教語辞典で見ますと、「仏の慈悲の極み、仏の至極の慈悲、菩薩は大悲の行を修するを皆普賢といふ」とあります。法然上人は、自分は智慧があった為にそれに邪魔されて御念仏に気付くことがおくれた、この次の生は一文不知の世俗の人に生れたいと言っておられたと云う。それで讃岐の庄松は法然上人の生れかわりだと云われている。庄松は御本山へお参りして、御門跡から希有の念仏者と聞いて相見したいと仰せになり、御前に出ると直ちに「親方、御信心はしっかりしとるか」と詰め寄ったと云う。御門跡様も「誰も

皆尊敬してはくれるが、後生の一大事を問うてくれた人は一人も無い」と感ぜられ求道に努めたという。庄松は或同行が、法性法身仏とはどういう仏かと聞いたら、襖の向うへかくれて「こういう仏様だ」と答えたという。

お話はこれで終って、これからお茶とお菓子をいただいてから、輪になってお話をしましょう。

○　○　○　○

私がお念仏に会わせて頂いたのは三十一歳の時で、それからお念仏を皆さんにと、花田先生と二人で日本国中と云ってもいい位、歩き廻ったのです。北陸の方へ行くと、御聖教を手に、ここには「思いとって」とあり、ここには「思い捨てて」とあるが、とか質問があったが、「ただ念仏して一つで走り廻りました。九州へ行った時、真田増丸という念仏者が八幡製鉄所の前で蜜柑箱の上に立って、出勤者に向って、聞いても聞かんでも懸命に念仏を説かれた。すると製鉄所の人々が真剣に仕事に励むようになり、社長もたずねると、数年前から坊さんが話していたと知り、それ以来社長も念仏を聞くようになったという。

その真田師の墓にお参りすると、守っている人が二人、毎朝花とお水をおそなえしてお参りする人であると。それで花田先生と私と御伺いしてお話を聞きました。その二人のお念仏が清らかで涼やかでした。私等の念仏は喜びに満ちて力が溢れ、燃えている。ところがお二人の念仏は清らかで静かでした。それに心打たれました。

それから富山の長谷顕性さんの所へ参り、小学校の講堂で、川畑愛義さんの弟の愛浩さん、医学部の学生でしたが、我々の講演が終って、最後に愛浩さんが演壇に立った。皆の話のあとで話題に困っているんじゃないかと心配していた。すると一声「切なる願いは必ず通る！」と叫ぶと同時に珠数を演壇に打ちつけ、珠数球がパラ〳〵と散って下の板間に音を立てて散った。

「切なる願いは必ず通る！」如来の本願力、加威力、大願業力を叫んだのですね。そして「願以て力を就し、力以て願を成ず」を絶叫したのでした。愛浩さんは三重医大の生理学の教授になったが、何の病気だったか、臨終になって自分で脈をとって「もうこれでお終い」と云って息絶えられた。生前に宮地廓慧師に「自分が死んだ墓の台の所に横書きに「悩み多き者此所に眠る」と書いて欲しいと頼んだ。宮地さんは「それでは墓の表面には梵語で南無阿弥陀仏と書こうと、愛義さんに相談されました。

そういうように三十一歳から今迄の私を顧みると燃えていた時もあり、だん〳〵さびれてきて八十四才になり、元の木阿弥になった。恰も一円相のように、始めに大きくふくれあがり、最後は尻つぼみになって念仏の無い時と同じ

です。喜びも出ない、唱えても砂を噛むような念仏。まあ法然上人の真似をして、床に入ってからお念仏します。人間は寝死といって眠っているまま死ぬことがある、最後のお別れになるから。これは続けて居りますが、あとは仏前に参った時位で仲々出てきません、なんにも無かった時に還っている。歎異抄九章に引かれるのはその為です。

聖人は「愚身の信心におきては」と仰言っています。愚身とあって愚心ではない、丸々と具体的に実在的に現実の私、概念でなくて私の身が九章のようになってきた。池山先生でしたか、唯円房の質問は命懸けの質問であると云われました。「念仏申し候へども踊躍歓喜の心おろそかに候こと、また急ぎ浄土へ参りたき心の候はぬは如何にと候べきことにて候やらん」と真摯にお尋ねすると「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じ心にてありけり」と御自身を先に出して仰せられる。ここを川畑先生だったか、母親が子供をつれて電車から降りる時は、母親がさきに降りて子供を抱いて降ろす。普通なら、お前もそうか私もそうだとなる。師匠と弟子だからそうあるべきある。ところがそんなことは毛筋程もない、皆如来様の御弟子である。「親鸞は弟子一人も持たず、如来の御代官を申しつるばかり」のお心がここにも滲み出ている。「よく〳〵案ずれば」喜べぬことをよく〳〵尋ねて見ると、煩悩が内に渦巻いている、その仕業なのである。実際私がこうして話をしている、皆様は聞いてござる。ところが私は全身で話しているつもりだが、心は動いていて、その内の一部が話しているのが偽らぬ所で、皆様も同じと思う。

池山先生のお話ですが、今心に浮んでいるままを正直にここへ書いてごらん、どんなことが書かれているか、人さまに見せられたら見せてごらんなさい、と。

先生の御歌に

ものを思へばやるせなきまま　思ふこと思はじとこそ思いなし、か

こんな乱れ心では不可だと思ったが、そのような煩悩具足の凡夫、私目当てのお呼び声、お念仏であったなあと。

話している時でもそうなのだから、黙っている時の心は大したもの、外面女菩薩、内心が夜叉です。「一猿六窓の譬」といって、一匹の猿を六つ窓のある箱に入れておくと六匹の猿が居る程、言、耳、鼻、舌、身、意の私達の感覚器官を走り廻ります。心とはコロコロと転々ところげ廻る所から出た名だとも云います。それ程心は八種九種に動き走り廻る。本当に煩悩具足の凡夫ですね。その私をお目当に「往生は一定」と申されて「然るに仏かねて知ろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよいよたのもしく、おぼゆるなり」。ここでも聖人は「われら」と仰せである。花田先生の御手紙にも拝読しましたが「喜ばしく」は消えて了うが「たのもしく」は消えない。丁度、子供の時に焼芋を買って、それを懐に入れてホコ〳〵する温か味、それを両手でおさえながら家へ帰る心地、たのもしさ、ですね。

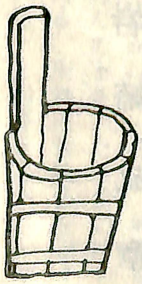
また「浄土へ急ぎ参りたき心のなくて、いささかの所労のこともあれば、死なんずるやらんと、心細くおぼゆることも煩悩の所為なり」。死ぬとお浄土へ参らして頂けるのだから喜ばねばならぬ、お浄土参りを喜んできたのに、いざ死を考えると喜びも消えて終う、元の木阿弥になってしまう。「久遠劫より流転せる苦悩の旧里は捨て難く、未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、まことによくよく煩悩の興盛に候にこそ。力なくして終るときに、彼土へは参るべきなり、急ぎ参りたき心なきものを、ことに憐れみ給ふなり」。六十一億年前から弱肉強食で生きている私達である。魚は人間の食うものだ、大根も人間の食うものだ、そのように罪を感ぜず、心はその故に煩悩具足の凡夫たる私になっている。

大阪の或る所に、向うに火葬場があり、横に妾町があり、墓場があり、養老院がある。その養老院へ行ったことがあるが、仏壇の前に棺が置いてあって、そこでお念仏のお話をしたのであるが、そこへ出て来ないで土間に藁をクシャクシャにした中に坐っている老人がいる。管理人に聞くと、あの人は生れ出てからあのような所で大きくなり老人になった人である。畳の上だと坐れず寝られもしない、あそこが一番いい所だという。

「久遠劫より流転せる苦悩の旧里は捨て難く、未だ生れざる安養の浄土は恋しからず候ことまことによく〳〵煩悩の興盛に候にこそ、名残り惜しく候へども娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼の土へは参るべきなり。急ぎ参りたき心なき者をことに憫みたまふなり。これにつけても大悲大願は頼もしく往生は決定と存じ候へ。踊躍歓喜の心もあり、急ぎ浄土へも参りたく候はんには、煩悩の無きやらんとあやしく候ひなまし」と云々。

そういう深い煩悩具足の者に対して、そういう者をこそ、私は抱きとってやるのだ、との御親の「仏心とは大慈悲これなり」の大慈大悲を喜ばせて頂くのであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

（あと次号に）



自覚についての無相師の書信

五十九年一月六日逝

岩崎成章

木村無相師逝いて早や一年、小生の生涯中、本願のお念仏一つとはっきりさせて頂いたことは実に千載一遇の御縁であり、謝し切れぬ恩徳であります。師が生前六度の御入院中も諸先生方や、各地の有縁の方に示された法縁は、小生には毎日のつきざる師の御垂示となってつきる処なしで、ありがたいことであります。

昭和五十三年頃の書信であるが、金沢の農家の谷内イトさんが種々の聞法の遍歴よりお尋ねした書信に対する無相師の御実感を卒直に返信して居られますが、これを記載させて頂きます。以下はその書信。

さて今回のお手紙、くり返し読ませて貰いました。私なりの考えを書かせて貰いますから、どうか読んで下さい。

この度のお手紙は「自覚」ということを繞ってのお手紙と受けとれることであります。大変有難いお手紙であります。私はこうして各地の同信の方から、信心について、お念仏についていろ〳〵お便りを頂くことによって、種々自分自身について考えさせられ、私の心の田圃を耕されて、こうした「法信」「御法のタヨリ」が一番有難いのです。私自身が、そのオタヨリをご縁に、私自身のことが、だんだんハッキリさせられるからであります。今回の谷内さんのお手紙も「宿業の自覚」といったことについての「ここをはっきり先生流に聞かせて貰いたいと思いました」とあり、よく聞いてくれました、誠に有難いことです。私は私流に考え、御返事するほかはないのであります。然しこの問題は大切な問題であるように思いますので、今日の手紙で、十分に私流の考えを書くことが出来るかわかりません。私の場合は、特に、先のイノチは分りません、ナムアミダ仏、私に聞かれるとなると、私の考えをいうよりも「唯信鈔文意」の親鸞聖人のオサトシを頂くほかはないのであります。私の善知識は親鸞聖人様と頂いているので、おさとしの中でも、この「唯信鈔文意」のお言葉が私にとってまことに有難いので、さてそのお言葉は「釈迦如来、よろずの善の中より、名号をえらびとりて、五法悪時悪世界、悪衆生、邪見、無信の者に与えたまえるなりと知るべし」と云うお言葉であります。今日の御返事も、この聖人のお言葉によりつゝ、書かせて貰う外ありません。ここで特に有難いのは「無信の者」というお言葉であります。

私大正十年、満十七才の時に「歎異抄」を読むようになってから、七十四の今迄に「歎異抄」はもう五十年くり返し、〳〵拝読申して来たのでした。悪衆生、邪見、といった「煩悩」については「煩悩具足」ということについては「煩悩具足」の凡夫のための本願念仏であり、本願名号であるということは、歎異抄によって、大体頂けても、谷内さんの今回の手紙にある言葉から言えば、宿業の自覚や、悪性の自覚は一応頂けたようでも、この自分が「無信の者」であるということが「歎異抄」ではハッキリと頂けなかったのであります。大体どうも自分は「無信の者」でないかということは、なんとなく感じさせられても。ところが、悪衆生、邪見といった宿業の自覚や悪性の自覚の外に、自分は「無信の者」でないかということは、なんとなく感じさせられても。ところが、悪衆生、邪見といった宿業の自覚や悪性の自覚の外に、自分は「無信の者」であるというイワユル自覚は、唯信鈔文意の聖人の、このお言葉によって自覚されたというか、つく〴〵思い知らされたのであります。あ、そうだったか、オレと云う人間は、生まれながらにして、無信の者であるから、自分の力で、いくら信心を得よう、頂こうとしても、ご信心が得られなかったのだなぁ。またナンベン、何十ペン、これで御信心を得たなあと思っても、やがて、それが崩れてしまい、モクアミのたよりない、不安な自分が残るだけだったのだなぁ。それはモト〳〵生れながらにして、自分には「真実の信じ心」というものはない、全くない、根こそぎない自分だから、どう、自分の力で励んでみても、勤めてみても、求めてみても、真実信心が得られなかったのだなぁ。と気づかされたのでありました。何十年となく、そうした無駄骨を折ったのでした。自分では絶対出来ないことを、自分の力でしようとし、出来るかのように思って。

ところが、聖人はハッキリと、お前は、悪衆生、邪見、であるだけでなく、生まれながらにして「無信の者」であるということを「知るべし」。かかる「悪衆生、邪見、無信の者」であるお前は、自分の力で信者になることは出来ない「ただ南無阿弥陀仏を頂くほかはないぞよ、如来様御廻向の、如来様がえらびにえらんで下さったお前の助かるための、ただ一つの「法」である、南無阿弥陀仏を頂くほかはない」ということ「知るべし」とおさとし下さっているのであります。この場合の「知るべし」は、我々愚かな凡

夫のアタマで、そういうことだと「わかれよ」「おぼえよ」「思いこめよ」というようなことで、それより外ない自分だということを思い知れよ。リクツや文句はともかくとして（リクツや文句のわかるようなお前じゃないから）悪衆生、邪見、無信の者であるお前は、お念仏一つ、ナムアミダブツ一つよりないということ、そのナムアミダブツ一つということも、悪衆生、邪見、無信の者ということも、悪衆生、邪見、無信の者であるお前では、自分では到底わからないということを思い知れよ、ということが「知るべし」ということで、到底そういうこと、自分は悪衆生、邪見、無信の者であるという助からぬ「機」ということも、自分、自身では徹底してわかる奴でないぞよ。またそうした者は、如来御廻向のナムアミダブツさま、お名号さま、お念仏さまでなくては、この世もあの世も、助かるということは出来ない。自分の力ではわからぬということを思い知れよと云うことが「知るべし」ということで、そういうお前であるということを、十劫の昔に見抜ききって、知りきって（如来法蔵さまが）そういうお前の助かる「道」は「法」は五劫思惟のあげくに、念仏一つ、ナムアミダブツ一つより外ないと如来法蔵さまがそういうことを「自覚」するような力のない無信の私になりかわって御自覚下さって、悪衆生、邪見、無信の者であるというようなホントウの自覚を、私自身が身についてはよう自覚しないまんまに助かるように、南無阿弥陀仏を、お念仏をスッカリ御成就下さって、この南無阿弥陀仏をやるぞよと、お与え下さっているのが、今の私へのお念仏さまであると、私は頂かせて貰っているのであります。そういう自分で、一生自分はホントウに機の自覚も、法の自覚も一生わからぬまんま、実生活の上では、一寸も身については分らぬそのまんま、今のまんま、これからも一生分らぬまんま、ホントウの「機」の自覚は一生出来ぬまんま、そういう自分は念仏一つより外ない、ナムアミダブツよりないということも、そういう自覚も一生ホントウに分らぬまんま、身については実生活の上では分らぬまんま、ホントウの自覚は出来ぬまんま息をひきとる。お前の「生死出離」ということも「迷いを転じサトリをヒラク」ということも「往生成仏」ということ、ホントウの自覚も、身についた自覚も出来ぬまんま、一切引受けるぞよ、それさえも一生分らぬお前である、自分であるということ「知るべし」思い知れよ、思い知るということも出来ぬまんま、一生チギレ〳〵にナムアミダブツ、ナムアミダブツと、阿呆の一つ覚えで生きてゆき、死んで行く外ないぞよ。その凡夫の素地のまんま生きて行けよ、死んで行けよ、それより外ないぞやと云うことが、釈迦如来、萬ずの善の中より名号を選びとりて五濁悪時悪世界、悪衆生、邪見無信の者に与え給えるなりと知るべしという聖人様のおさとしではありますまいか。

（次号）

信仰書簡

清信士度人經にある流轉三界偈

菅瀬芳英

拝復　不忘様には正覚化生の身となり、四年を一期として此世を去り給いし趣き驚き入り申し候。人生の無常はかねて覚悟はいたし居り候えども、今更の如く感じ入り申し候。御寺内御一同様さだめて御愁痛の事と御察し申上候。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

人生の常、凡情の上よりは恩愛の涙は禁じ得るものにあらず、泣いて泣き尽し、涙のかわくまで泣くより外御座なく候。仏様の善巧方便もあまりにひどい、唯仏様を怨むより外御座なく候様な気も起り候が、然しその中より凡情は凡情とし、衆生貪瞋煩悩中、能生清浄願往生心が起り申し候。悲しみは転じて慶びとなり、永久の別れに非ずして浄土にて再会の期を楽み申し候。いよいよ不忘の名の如く四歳を一期として夢の如く此世を去るとは如何に忘れ様と思うとも忘れることは出来ない、唯この方便を無にせない様、益々いのち長きしるしには御報謝に怠らない様致さねばなり申さず候。南無阿弥陀仏、々々々々々々、々々々々々々こうお念仏を相続致し候えども、その中より残念なことをした、両親の心はどの様にあろうか、御老婆の心はどの様にあろうか、門徒も残念なことであろう、何という悲惨なことであろうと思うと、また凡情として涙も出る悲しくもある。悲喜こもごも起るので、やはり安養浄土に到るまでは此世の人情は到底断尽することは出来ないけれども、其中より、摂取不捨の誓願空しからず、永劫の迷夢より醒め浄土往生を期し候事何より嬉しく、永久の別れに非ず候と思えば、ただちに御念仏になり申し候。南無阿弥陀仏々々々々々々。先はとりあえず書中を以て御悔み申し上候。

四月四日　　敬具

飛鳥貫徹様
奥　　様
御老母様

恩愛はなはだたちがたく　生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ　罪障を滅し度脱せし
生死の苦海ほとりなし　ひさしく沈める我等をば
弥陀弘誓のふねのみぞ　のせて必ずわたしける
南無阿弥陀仏々々々々々々。

○

四苦八苦とは経の中に説いてありて、其中の愛別離苦ということは此度身に沁んで感じられたことである。この様につらい思いをせねばならぬなれば、親子の縁を結んだのをうらめしく思う様になってくるのである。なぜ生れたのであろう、なぜ死んだのであろう、思えば思うほど考えれば考えるほど愚痴が起りて、どうしても思いあきらめることは出来ない。思うまいと思えば思うほど思いがむらむら起りてくるのである。平生より法を聞いておるのであるから、此様な気の弱いことではならないと、幾度も思い返そうとりきんでも駄目である。こうなると泣くより別に道がない。これが泣かずに居られよか、どうしても心が承知しない、ただ無意識的に涙が出て、泣くより外にてはない。一夜も二夜も泣きあかし、三晩も四晩も泣き、夜も昼も泣きどおし、いっそ泣いて〳〵泣き続けたいものである。此に到りて思い起こし気付かして貰うのが大悲の親様である。貴台が子供のために泣いたよりもなお〳〵長く泣いて御座るのが大悲の親様である。我等どものために、久遠劫来より泣きづめが親様であったと、此度の事で愛別離苦の幾分の事を知らして貰うたのであるが、大悲の親様は、早くよりお知り下さって、四苦八苦の迷いの中に沈んで居るのを御覧下さって慈悲を垂れて下さるのである。自分どもが苦しんで居る時一緒に苦しみ、泣く時に一緒に泣いて下され、自分が慶ぶとき一緒に慶んで下さるのが大悲の親様である。

南無阿弥陀仏々々々々々、々々々々々々。

先日ある処の奥様が子供を亡くせられて非常に落胆して居られて日々愚痴をこぼしては泣いて居られたのである。その家は神道であり、奥様の里は禅宗であるから、宗教と云う様な考えは微塵もなく、余程困難して居られたのである。ところが其人の友人に法を聞いて居る人があって、宗教を勧められたことから、其人の宅に参り法話をしたのである。ところが始めてのこととて話すことが随分むつかしかったが、前に書いてある通り、泣いて泣いて泣きつくしなさい。その涙の中から、此様に泣いて居る自分より長い間泣き続けて居て下されたのが大悲の親であると話したら非常にその事が胸にはまり、如来大悲の親様に気付かれたのである。自分は宗教を聞いたらあきらめよ、思うな、愚痴をこぼすな、忘れよと云われることであろうと思うて、余程覚悟していたのである。あまりに子供に別れたのがつらいのであるから、充分に決心して居たのに、そんな決心も覚悟もいらないで、自分も同様に泣いて、自分が泣いて居るよりもなお〳〵泣いて下さるのが大悲の親様であると聞いて、真実の同情者は此世の中には大悲の親様であると気付かして貰って、始めて胸が晴れた様であるとよろこばれたのである。南無阿弥陀仏々々々々々々、々々々々々々。ただ〳〵此上は御恩の称名より外にようのないことにさせて貰いました。南無阿弥陀仏々々々々々々。

仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよ〳〵頼もしく覚ゆるなり

と歎異抄にある。吾等が迷夢中にあり苦しんで居る煩悩具足を御承知遊ばしての上の大慈悲が有難い。吾等の往生は仏様の方よりお定め下されたのである。迷って居りながら迷いを知らないもの、種々なことに出遇わして貰い、如来様のお慈悲に気付いたのである。人生において人生上の事が身にこたえ、ついに如来の真実が吾身に引き受けられる事になったのである。

「不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまふ」とある。仏のかたより吾等の往生をきめて下されたのである。向うが先にきまったから、疑い深い我等があなたにおまかせすることが出来たのである。「如来わが往生をさだめたまいし」と蓮如上人が、如来がわが往定をさだめたまいしと御慶びなされたので、如来わが往生とのお言葉が真に力強い、南無阿弥陀仏、々々々々々々。々々々々々々。親様の大慈大悲が有難い、ただこの上は南無阿弥陀仏、々々々々々々。々々々々々々。

五月一日　芳英

飛鳥一二美様

涅槃会の歌

遠く御空に　楽の音すみて　沙羅の林は花咲きみてり
あわれ尊き　大御姿

高きいやしき差別もあらで　共に真如の光を仰ぐ
実にも尊き　救世の御業

心あわせて仏のみ跡を　共にたどれと真心こめて
実に尊き　大御教

法のともしび　輝きまして　久遠に無明の闇路を照らす
あわれ尊き　大御聖

御名につながるいのち

花田正夫

経に「仏凡一体　生仏不二」とある。蓮如上人は「仏心と凡心と一つになりたるところを信心といはるるなり」と云われている。これを和らげて「あなたの心が、わたしの心、わたしの心があなたの心」と云われ、更にそうなれるのは「わたしがあなたになるのじゃないが、あなたがわたしになるこころ」と述べられている。二元対立の相対差別の智慧しかない我々には、絶対平等の仏の真実心を知る目もなく、近づく足もないが、仏の大悲大願はこの身になって下さる、恰も親心子知らずだが、親はその子の身になって育むように、ひとえに仏が同心して下さるのである。

近角常観先生が二十九歳の時、大煩悶の末に信心が開発された時「仏は同心の最大良友であった」と随喜された。

私自身は歎異抄によって、同座して下さる親鸞聖人の心に浴して、同心の善知識を恵まれたのである。「士は己を知る人のために死す」と云うが、我が身になって下さる人があれば無人空迥の人生に黎明の光が射してくる。然しそれは、私共が求めて得られたものでなく、求める心もない身に今一人の私となって下さる方の御蔭である。ここに永遠に離れることのない白道の伴侶を恵まれるのである。何という喜び、何という御恩であろうか、南無、南無。

世間虚仮唯仏是真

聖徳太子は、法華、維摩、勝鬘の三経を身読されて、その信の余瀝として、御家庭にあって「世間は虚仮なり、唯仏のみ是れ真実なり」と常に仰言っていた。

親鸞聖人は、歎異抄に「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」と仰せられたと誌されている。前賢後聖その規を一つにされるところと感佩している。

六十七で亡くなられた池山先生の是の世での最後の言葉は「何も残るものはない、何も残るものはない。ただ念仏だけが残る、ただ念仏だけがのこる。えらいこったよ、有り難いこったよ」であった。その前にお別れを悲しまれる友子夫人に「しっかり念仏するんだ、しっかり念仏するんだ。どこまでも念仏でつながっているんだよ、いゝか、南無阿弥陀仏」と淳々と語られている。

白井成允先生は八十五で亡くなられたが、長女の明子さまに「人生は限りなく淋しく、はかなく、無常である」と話していられ、「明子も今後の生を念仏の中に生きて下さい。念仏申してるうちに必ず途は開けてくるのですから」又「いつどこででも、もし父のことを思い出すことがあったら、南無阿弥陀仏と唱えて下さい。念仏の中に私は生きつづけているのですから」と書きのこされた。

両先生は、人生の最後に身をもって、太子の金言をそのまゝに信嘗されたのであった。無常の嵐の前に地上のあらゆる縁も断たれて行くが「今生夢のうちのちぎりをしるべとして来生さとりの前の縁を結び、われおくれなば人に導かれ、我先き立たば人を導きて世々に善友となり、生々に知識とならん」という白道が開けてくることは、ひとえに御名につながるいのちのお蔭である。

しかしながら、煩悩具足の身の悲しさには、口伝抄の十七条にあるように「たとひ未来の生処を弥陀の報土と定め、浄土の再会を疑ひなしと期するとも、後れ先だつ一旦の悲、迷える凡夫として何ぞこれなからん。なかんづく曠劫流転の世々生々の芳契、今生をもて輪転の結句とし、愛執愛着の仮りの宿、この人界の火宅、出離の旧里たるべきあいだ、依正二報ともにいかでか名残り惜しからざらん」と示されて、凡夫のありのままに、愚かにつたなげにして歎き悲しまんことは他力往生の人としてふさわしいとまで説かれている。歎異抄九条には「いそぎまいりたき心なくして、いささかの所労のこともあれば死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩悩の所為なり、名残り措し く思へども娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼の土へはまゐるべきなり云々」とある。私自身病気々々ですごしているが、いよ〳〵となると、ここまで言って下さる聖人だけが何よりも力強く、たのもしい力となって下さるのである。

然しこの大悲に手をとられて会うてよろこび、別れてかなしむだけの人生にあって、それを超えて、永遠の友を恵まれることは、まことに「えらいこったよ、ありがたいこったよ」であります。

会うてまた　わかるる日なり　今日よりは
またの会ふ日のめぐりそめける

と、ペルから見舞われた御長男の寿夫さんを送られた時の池山先生の御信境、身にしむことであります。

あとがき

本年の寒さで待ちに待った花の三月でありました。この時、木村無相師の一周忌もすぎて、ありがたいことには左記の著書が出版されました、御案内申上げます。

歎異抄を生きて　求道六十年　木村無相

発行所　東京都千代田区内神田三ノ一七ノ八
小山ビル・光雲社

定　価　千五百円　送料別

発行人の砂田保さんは「わが子を手塩にかけて育てやっと世に送り出すような気持で作った」由であります。

○

近角先生の「如来の本願」は、それまで如来の慈悲と述べられていたが、矢張り本願の心に甚深のお味いを持たれた御述懐であります。

「大いなる受入れ」の池山先生は、歎異抄とニイチェの「超人」を照合せられて、如来のおひとり働き、手もとには何も無いことをお話されたものであります。

「慈光日誌抄」は、仏光をわが身にうけられて、わがはからいをすっかり払い流されてのお生活をお述べ下さいました。

「一道会の記」は次号に続きますが、榊原師のおひとり舞台で、御疲れだったと思います。文字通り一期一会の思いの切な一道会でありました。

「自覚についての無相師の書信」は、一周忌に川崎市から武生に出掛けられた岩崎師が、篤信の老女の方が無相師に尋ねられた返信が非常に有り難いので、原稿にして下さったものであります。

「信仰書簡」の菅瀬師の法信は、最近お娘さんを亡くされた方々がありますので、師の御悔みの書簡をいただきました。あきらめよ、でなく、あきらめられぬ涙の上にそそがれる仏の大悲をお述べ下さったものであります。

拙稿は、御名によってはじめて心と心が永遠にとけあって行けることの一大事について誌しましたが舌足らずに終りました、御判読願います。

御　案　内

三月十七日の例会は開かせて頂きます。「御名につながるいのち」を詳しく申上げたいと心組んであります。

御心配おかけした白内障の手術は二週間ほどの入院で無事に退院しました、御安心下さいますように。

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）

印刷人　坂部光雄　愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所　慈光社　名古屋市南区駈上一丁目十二番地
振替口座　名古屋　六一〇四七番
郵便番号　四五七

編集・発行人　花田正夫　名古屋市南区駈上一丁目十二番地
電話　八二一局七〇三七番

慈光　第三十七巻第三号　昭和六十年三月十五日発行　（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可